

## 令和5年度北杜市総合教育会議 会議録

開催日時 令和5年11月29日(水) 午前10時00分

開催場所 北杜市役所 北館大会議室

出席者 委員  
輿水清司 教育長、小林秀彦 教育委員、祝とよ子 教育委員、  
藤森勇 教育委員、伊藤やよい 教育委員  
上村英司 市長

### 教育委員会(教育部)

加藤寿 教育部長、渡辺美津穂 教育部参事、鷹左右紀 教育総務課長、  
村松佳幸 学術課長、清水悦子 学校給食課長、田丸敬一 生涯学習課  
長、小林晋 甲陵中・高等学校事務長、中澤徹也 中央図書館長、進藤  
俊幸 教育指導監、清水宏朗 指導主事、浅川大輔 教育総務課総務担  
当リーダー

### 事務局

小泉雅人 総務部長、清水厚司 総務部参事、佐藤康弘 総務課長、  
原章浩 総務課総務担当リーダー、内藤莉彩子 総務課総務担当

議題 (1) 不登校児童生徒対策支援について  
(2) 市立図書館適正配置等検討について  
(3) その他

公開・非公開の別 公開

傍聴人の人数 1人

### 内容

1. 開会(午前10時00分)
2. 市長あいさつ
3. 教育長あいさつ
4. 協議事項

地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第3項の規定に基づき  
会議招集者が市長であるため、市長が協議事項の議長となる。

(議長)

「(1) 不登校児童生徒対策支援について」を教育部に説明を求める。

(教育部)

資料1 不登校児童生徒対策支援 より説明。

(議長)

意見、質問を求める。

(委員)

北杜市では教育支援センターエールを開設しているが、そこに子供が通える体制を整えてもらっていることは、直接関わっているものとしてありがたく思っている。同じような他市町村の教育支援に関わる施設と比べてみても、北杜市は恵まれている。

エールに通っている児童生徒については、学校に行けなくなった原因は一人一人事情が異なっている。自信が持てないとか、勉強についていけなくて困るとか、学校の玄関までは行けるが、中に入る時に抵抗が生じてしまう。別の建物だったら違和感がないが、いざ自分が通っている学校になると足が止まってしまう。一人一人違うので、対策として一括りということではなくて、それぞれ個に応じた対応の仕方を考えていかなければいけない。

支援センターとしてそういう子供たちも受け入れている中で、できればこれからの将来のことを考えて、少しでも周りの子と関わりを持ってほしい、少しでも学校に戻ってもらいたいという願いがある。

義務教育の内容というのは、生きていくための人間の土台を作る内容になっているなど思っている。学校での学びはさまざまな人との関係、学び、その内容についてベストとは言わないかもしれないが、ベストに近いベターの内容を持っているなど、そして国語算数の教科ばかりではなくて、現代に応じた教育もしている。中学生で言えば職業選択、それから電子機器の使い方、病気の感染症の対応。社会に出ても役立つものも学校では与えているが、不登校の子供たちというのはなかなかそういう機会が得られないということで、将来への不安もある。少しでも義務教育、学校の良さというものを知らせながら、子供たちに学校へ行ってもらいたいという思いでいる。

それから、保護者との関係について、保護者と学校で、ちょっとしたボタンの

掛け違いが、最初は1、2ミリでセロハンテープでも貼れば風が収まるところがこじれてしまって、それが結果的に子供の不登校に繋がっている例もある。いろいろな条件を考えていかなければいけない。

それから、支援センターに来る子供で少しずつ学校に戻ろうという気持ちの子もいる。過去に、自分のいる学校にはなかなか戻れず転校し学校に戻った例もある。市内であれば連携を取ることもできると思うので、環境を変えることによって学校に戻れる生徒も出てくると思う。そのような対策を考えて、一人でも二人でも学校に戻れる生徒が出てくるといい。

ただし、全部が全部学校に戻るということも不可能で、その子供の状況に応じた段階を踏んでいく必要があると感じる。

(委員)

びっくりするような不登校の児童生徒の増加数だが、最近、世の中がものすごい勢いで変わっていると感じる。特に多様性ということが言われてきていて、そのことも関係すると思っている。

例えば、家庭のあり方も多様になってきている。学校教育についての考え方、学校へ行くことについての価値観、こういうものも世の中がさまざまになっている。北杜市内でもフリースクールに行くことを良しとしている家庭があるというようなことも聞いている。世の中の動きとして、今、学校教育は変わらなくちゃいけないときだと強く感じる。

資料の「COCOLOプラン」に、不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整えるとは、目からウロコの表現だった。自分が勤務していた時には、みんなが学ぶ時には一緒に学ぼうという感じだったが、こういうプランでいかなければ教育は立ち行かないのかなということは心配でもある。そういう多様な価値観の中で、子供たちが学校に行かない中での社会性について。は一番心配しているところ。

今、コミュニケーションがとても苦手になってきていて、社会に出てから周りとのコミュニケーションが取れずに仕事がうまくいかないですぐやめてしまう子が増えている。そして、中学校の統合問題が出ていますが、小学校に行けなかった子が中学校に入っていけるようになる。その子にとっては環境の変化や新しい友達ができるということがきっかけになって、今までの自分を脱ぎ捨ててやってみようという気持ちになれると思う。そういう点でも中学校では大勢の子が多様に学びあって、社会性を身につけるといふことで、統合はやっぱり大事と感じている。

(委員)

不登校の支援の目的については、社会的な自立ということ。勉強が遅れることで進路選択へ不利益が出るということ、自立などへのリスク、そういうことが支援の目的になると思う。取り組みの基本というのは、未然防止をできるだけ日常化することと思っている。指導する上で相手の気持ちに寄り添うということがポイントになると思っていて、通いたくなる学校、担任の先生は学級づくりをもう一度見直していくというような機会をつくっていくことが大事。北杜市の進めている、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと一緒に支援をして、組織として防止や対応をしていくことも大事だと考える。

私事だが、担任をしている頃、子供が学校へ来て顔色が変わるとか、ちょっと不機嫌だとか様子を観察していく中で、一人一人状況が違うので声の掛け方であったり、タイミングであったり、意識をしながら接して、その中でいつもと違う様子の子供から話を聞く。そして、そのことを家庭に連絡して、連絡したことは子供さんには言わないでくださいと親御さんに話しながら、家庭の様子をまた学校へ知らせてもらって、少しずつ一緒になって指導していくこと。そして、一人や二人で解決できないような時には、学校が組織となって共有してやっていくということが大事だと思う。

不登校の子どもたちが保健室登校をした場合は、養護教諭の先生の負担が大きい。図書室へ行って学習をしたり、図書の貸し出しをする場合は、図書館司書の先生の負担が大きい。それから担任は、放課後に個別学習をしたり、例えば6年生だと卒業文集、卒業制作なんていうことはかなり大きな思い出になるのでそれをマンツーマンで指導する。そうすると担任の負担も非常に大きい。

居場所を作っていくということで、校内支援委員というお話があった。その中で学習体制だとか支援体制整備ということも挙げられていたので、どういう方が担当していくかということはずごく大事なことだと思っている。今までの学校の中では、人的にどうしても無理が出てしまうので、そうすると今は働き方改革じゃないが、子供に対応することによって自分の仕事ができないから遅くなるというのは当然のことで、なかなか決められた時間に帰宅できないというのが当たり前の状況になっていると思う。

学校に行けない子にとって、エールがあるというのはとてもありがたいことだと思っている。エールを担当している先生方は教員のOBの方なので、子供にとっては学習が保証できるし、学習の内容は自己決定していくということで、本人に沿った学習ができる。また、そのルールで行くことによって規則正しい生活ができるということで、リズムをつくっていくということも含めてメリットがあると思う。

なので、学校に居場所を作るということは非常に大事で、そういう機会を作っ

ている学校もあるようだが、そこに関わる方がいないと、どうしても先程の養護教諭の先生、司書の先生、教務関係の先生が担当をせざるを得ないという現状があるので、その辺を改善していけるような案が具体的に出されれば良いと思う。その辺について、お考えがあるようならば、お聞かせいただき自分も一緒に勉強させていただければと思う。

あと、義務教育の中で小学校中学校と進めていって、不登校の子供たちが中学を卒業した後どうなっているのかを情報として持ちえないので、その辺を市として追いかけているのかあれば知りたいし、そういう子供たちがその後どんな風になっているのかということが多分、今ある現状を理解する上で大切な情報なのかなと思う。

情報が分かるようであれば教えてほしい。

(教育部)

追跡調査等に行っていない。

(委員)

資料を見せていただいて、本当に胸が詰まる思いだが、令和元年からの不登校の増加について、私もまさに子供が小中に行ってからコロナだったということ、コロナ元年もしっかり経験しているということで、さもありなんという気がする。

この時期は学校に魅力を感じない子供が増えていて、それが何かいじめがあるとか特定の理由ではないけれども、学校に行く理由が見つからない。あるいは学校にそもそも来ないでいいよって最初から言われていたこともあって、どこが責任とかではないけれども、全国的に一番弱い立場の子供が犠牲になったという思い。コロナも5類に移行して、今年はいろんな行事も再開されつつあるので、取り戻せるものなら何とか取り戻させてあげたい。

北杜市としてもエールをはじめ、いろんな受け皿を用意してくださっているということがよく伝わるが、子供の友達で不登校の親御さんの話を聞くと、知っているのか知らないのか、こんなに手厚く考えられているのに情報が届いていないのか、あるいはそこに魅力を感じないのか。エールに行ける子は本当に親御さんの考えもあってラッキーだと思うが、そこにも行こうとしない、行けないとか、そういう人たちもたくさんいて、そもそも信頼関係がもう崩れてしまっているような状況もある。

それを改善するのは誰か一人だということではないが、多分、その子供たちは信頼できる大人だったり、先生だったり、地域の人だったりをどこかに求めている。でも今は、そういうことすら求められない働き方改革で、求められない遠慮

もあつたり、先生のご負担を考えると、あるいはそんなことしてもらっても結局変わらないという信頼感が揺らいでいたりも耳にする。

ここまで来てしまったらという言い方も変だが、個人的には学校的教育というのはとても手厚いことを考えてくださっているので、ここにまず行くことが大事で最優先だと思う。ここに行けない人たちっていうのは将来、なかなか社会に出ていけず、そういう社会であり続けるだろうということも実際感じている。本当は学校に戻ってきてと言いたいところだが、逆に言うと本当に社会が変化していて、良い意味悪い意味成り立つ社会にこれからなっていくのかもしれないと思うと、受け皿を残しておくことも必要。

どんどん整備していくということも大事だけれども、学校だけに頼るのではなく、自分も含めて地域で信頼できる、学校とは関係ない地域の大人がいてあげることが別の意味で必要だろう。町の商店のおじさんでもいいし、剣道を習っていて剣道だけは行くとか、そんなようなことができるといいなと思った。

学校の中で生まれた地域の力というのを強く、自分の戒めとして感じていることを友達のお母さんに聞いた。

ある中学校で授業中に抜け出してトイレに行ってしまうようなことが起きている。それを止められない、トイレに行きたいというのは止めることはできない。本当に具合が悪くてトイレに行きたいのか、ただ抜け出たくて行きたいのかは、多分、先生、あるいは他の生徒の中では見分けがついているけれど、それを言うてはいけない雰囲気。

参観日ですらそういうことが普段通りにまかり通ってしまっているのを見て、その知り合いのお母さんは「だめじゃん。そんなのちゃんと休憩時間に行っておかなきゃだめじゃん」と一言言ったらしい。そうすると、その子はハッとして、それまで先生のことと呼び捨てにするようなその子に対して「だめだよ、ちゃんと先生つけなきゃ」ってきちんと言えるお母さんがいた。

すごく頼もしくて、そういうことが言えるような環境にしていく、先生がなかなか表立って公的に言えないことを親や地域の大人がもっと言っていけるような世の中にまた戻していかなければと思った。

色々考えてくださってありがとうございます。

(教育長)

1 ページの全国のグラフの様子を見て、平成25年から徐々に10年連続増加して、そして平成30年、令和元年あたりから激増をしていると、まさにこれはコロナと一致している時期になるが、激増しているこの要因というものをまず考えなければいけないということを強く思う。

一つは、感染予防対策ということで、長期の登校自粛だったり、心配だから家で子供を休ませてくださいという指導があった。そのことがコロナでは有効であったが、学校に来るということに対してハードルを低くしたというか、学校を休みやすくなったということは大きく影響していると思う。

不登校の小学生が非常に増えている中で、特に低学年が以前はほとんどいなかった。それがコロナをきっかけに、学校へ行くという習慣ができる前に学校を休むっていうことはある意味良いことだが、そういう状況が不登校へ繋がっているというようなことも感じている。

あとは当然、友達と関わる機会がだいぶ減ったので、関わり不足というか、コミュニケーション不足と言うか、給食も黙って食べて会話もなし、授業中もマスクをして相手の表情も見えない。そういう状況が長く続いたことによって、小さい子供たちには大きな影響があった。まずは、この激増している要因を私達は、コロナが明けたことによってどう取り戻すかを学校と連携しながら考えていかなければと強く思っている。

小学生が不登校の状態になりますと、それはそのまま中学校の方に上がっていくので、もっと大変な状況が生まれていくということは当然考えられる。今後もとても心配な状況。

3ページの北杜市の支援対策がいくつか出ているが、先ほど委員の皆様からもそれぞれ個々の状況が違うということと、段階がさまざまあるというようなことが挙げられた。

例えば、家から全く出られない子、長年不登校の子、そういう子供たちのために民間施設等に関するガイドラインということで、ICTを利用して学校と教育相談をしながら、家で民間の業者と繋がって教科の勉強をする。それを出席扱いできる状況。家から出られない子供たちがそういう関わりを持って一歩でも社会的自立を目指していく。

家からは出られるけど学校になかなか行けない子、学校の玄関までも行けないということになると、それが今度は環境を変えてエールという道が開けてくる。エールであれば少人数で個々の対応になるので、行けば学習もできて少人数での関わりもできるという状況。

そして、学校には行けるが教室に入れないという子は、保健室登校や、図書館登校をするが、そういう子供たちのための教室以外の居場所作りを、今、いくつかの学校で実践している。それが、比較的中学校で実践されている。これは、教科担任ということで、教科空き時間で不登校の別室対応をしている状況があるということ。そういう状況を他の中学校にも、そして小学校でも対応ができる状態を作っていきたい。

あとは、どこまで行けるかという状況に加えて、個々のいろんな悩みがあり、

スクールソーシャルワーカーによる子供と保護者への対応や、ホットラインによる相談の窓口の開設というようなことも、徐々に充実してきている。

加えてここで大事なことが、子供たちが教室に入れなくなってしまうことがある。学校に来ないと、教育の教育力が及ばなくなってしまう。担任の先生が電話を掛けたり、家庭訪問をするが、本当にそれだけの繋がりになってしまう。

学校に来て教室に入れなくても、学校にさえ来てくれると担任に限らずいろんな先生の関わりが持てる、継続できるということで、この組織的な繋がりができるということが大事。学校に来れなくなってしまった子が、せめて教室に入れられない状況の時、別の居場所をつくってやるということは、すごく大事なことだと思っている。

子供たちがなぜ学校に来れないか、教室に入れれないか、さまざまな理由があるが、私が思うに、最近の子供たちは本当にエネルギーが不足しているんだなということを感じる。昔の子は、家にいるよりも学校に行く方が楽しくて、そこへ向かおうという気持ちがすごくあったが、今の子供たちはそういうエネルギーがだんだん不足している。同時に、家にも居やすい状況は昔よりはあるのかなとも感じる。せめて、そういう子供たちが学校に来て、他の子と関わりやすい状況を今後取り入れ、居場所を作っていく必要があるということで、別室を設定したり、委員からも出ましたが、校内支援等についてもこれからの体制整備ができることを考えていきたいと思う。

もう一つは、エールへ行くと学校とは別の場所になるので、学校の意識の持ち方が、結構おまかせになってしまうようなところがある。子供たちの意識として学校とは別の場所という意識があるが、なるべくエールと学校との距離を縮めていきたいということで、やはり最近のICTの活用というのは、エールにいて学校の教室と繋がることができる。エールから学校へ戻ることが比較的できやすいということも感じる。そんなことも今後考えていかなければと思っている。

いろいろな機会を通じて、学びたい時に学べる環境という話があったが、そういう場やいろいろなことを取り組みながら、効果的な方法というのを今後探っていければと感じている。

(議長)

皆さんが学校に子供たちを一生懸命戻すということを努力されている中で、発言するのはちょっと無責任なような気もするが、一つは無気力不安が78人ということで、この無気力不安の要因がよく分からないなというところがある。

例えば、先ほど委員から話があった、剣道は好きだけど、学校は好きだけど学校には行かないという人もいるし、無気力でなくて学校に興味がない人、宿題を



やれとか学校の勉強についていけないとか、将来が不安だとか、そういう子供もいるでしょうし、78人いれば78人のさまざまな要因があるということも思った。

そういう意味で言うと、やはり学校は楽しくないと子供は行かないんだろうと思う。友達と話をするのは楽しいとか、サッカーが楽しいとか、何かこう楽しさがないと学校に興味がないだろうということで、その辺を大人が思いながら学校を楽しめる場にしていくことも非常に大事だということも強く思った。

それと、孤立するということ、その子供が誰とも関われなくなると本当によくないと思うので、何かしら社会性が保たれているということは大事。

その辺の把握は恐らく学校ではできないというか、人的にも難しいと思うので、どういう風に把握していくのかということ。学校に来てくれればそういうことも把握できるが、家に閉じこもってしまうとなかなか分からないことがあるので、そういうところが課題だと思っている。

それと、不登校の子供が学校に行かないことがいけないのではなくて、そこで子供たちがどういう状況に置かれているかということで、悪い状況に置かれないうようにするということがやはり大事だと思う。不登校が悪いことではなく、内容を見ながら検討していかなければならない時代だと思う。

(議長)

「(2) 市立図書館適正配置等検討について」を教育部に説明を求める。

(教育部)

資料2 北杜市立図書館適正配置等検討に関する提言書 より説明。

(議長)

意見、質問を求める。

(委員)

いろんな図書館の司書の方がいらっしゃると思うが、その方たちがどうなっていくのかが気になる。

例えば、司書の方がいないと本の管理は誰がするんだろうとか、貸出とか、本が壊れていくような時もあると思うが、整理やラベルを直したりだとか、そういうことはどなたがどんな風に取り組んでいくのか。

それから、いろんなところで取り組みをしていると思うが、例えば読み聞かせ、ハロウィーン、落語などいろいろなイベントをやっているということも聞いたが、そういう企画や運営がどうなっていくのか。実際に、いろんな図書館へ協力

する協力員、運営員の方が企画運営をしていると思うが、そういうことがうまく機能していけるといいと思う。

図書館の利用が非常に少ないという話を聞いた。学校教育で何が大事かというところ、本好きの子供にしていくということだと思う。いろんなものに興味を持つと生涯学習に繋がっていき、人との関わりに出てくる。先程の不登校のことも改善の関連性が出てくると思う。

本に絡ませたイベントを開くことも大事なことと思っている。朗読会や、聞いた話だが、ビブリオバトルというゲーム的な要素を含んで本の紹介をしていき、面白いものに聞いている人が挙手をしてそっちの本を読みたいとか、そういうようなことを子供や大人、年齢に関係なく参加する。そういった、興味関心を持つような取り組みをやっていることも、本好きな子供にしていく、地域にしていく方法だと思った。

説明の中でWi-Fi環境のことがあったが、一台端末ということで、今いろいろな取り組みをしているので、調べ学習などの活用に繋がっていただければいいと思う。学習机や椅子の設置、学習スペースの活用も併せて推進できればいいと思う。

(教育部)

司書については、将来的に図書館を3館に集約するという形で考えている。本の管理や傷んだ本を直すといったことを司書の役割として定めていきたいと思っているので、アウトリーチサービスの一環で各施設にしっかりサービスができるような体制を作っていきたいと思う。

次に、読み聞かせなどのイベント企画運営について。各施設ということではなく、市内全体のバランスを見ながらイベントをしていくという形を考えている。その際にはボランティアの方がそれぞれ地域にいますので、しっかりと連絡調整を取った中で、ボランティアの協力もお願いしたい。

図書館利用者が少ない中で、さまざまなイベントをしていくということで、ビブリオバトルについても現在実施をしており、子供たちも一生懸命に本を紹介してくれて、聞いている方も興味を持ってぜひ読んでみたいなどの声は聞いている。

また、活動としても、子ども司書や図書委員にお願いをしたり、オンライン読み聞かせや、例えば、読書記録のアプリを使うなど、これからの時代に即したような形でいろいろなイベントを考えられると思う。そういうところもしっかりと取り組んでいきたい。

また、Wi-Fi環境については、すでに図書館の中はフリーWi-Fiが飛んでいる。学習多目的スペースも設置をするので、そういうところの状況等をし

っかりと構築していきたいなと考えている。

(委員)

おおむね賛成でよくまとめられていると思う。図書館統合についての反対意見もいろいろなところから出ていると思うが、それに対応するような政策も考えていただいていると感じる。

図書館に求めることを考えたとき、一番の目的、特に子供なんかはやはり居場所だと思う。そこで本を借りることはどちらかというと副産物で、面白そうだから借りるっていう子はたくさんいると思うが、そこで落ち着いて勉強ができるとか、本を手にとれるとか、そういう雰囲気がとても大事で、子供だけでなく大人にもそういう場所が残るといことなので、これは本が少なくなる分、そういうスペースも逆に確保できているのかなと期待しているところでもある。

その中でもやはり、紙の本を全く置かないのではなく、ある程度残して雰囲気だったりとして残すってことも本に対して失礼な話かもしれないが、まず本に囲まれているっていう雰囲気はぜひ残してほしいと思う。

それで、さらに詳しい情報や、こういう本を読みたいっていうのは、オンラインで予約して受け取るポイントを定めて受け取るというシステムが普及していると書いてあったが、それで十分だと思う。

あとは、本にまつわるイベント、ビブリオバトル、高校生が書いたPOPを展示するコーナーもあるが、そういうことも時々各コミュニティコモンズにも回っていけるといいと思う。

前回の定例会でも言ったが、ぜひSNSを活用して市内の司書によるおすすめ本などの投稿があっても面白いのかなと思う。

(委員)

まず、このことが出てきたということは、各図書館も含めて全てだと思うが、どの年代の人がどのように利用している状況なのか、貸出カード等を集計して、結果が出てきたのかなと理解をしている。

人口の割に図書館の数自体は他の市町村に比べても多いと感じているが、拠点をつつ作るということで、その3つで同じような内容のものが重複してもあまり意味がないと思うので、どうせこのように形にするのであれば、すみ分けというか3つの内容を少し変えることによって、我々が見る図書の種類というか数というかが増えるのではという思いもある。

貸出については配達などもできるので、そのような形は一つどうかなということがある。

それから、著作権の関係で、難しいという話も聞いたが、敢えてもう一度言わ

せてもらえれば、本の内容が現場に行かなくても、それぞれのコミュニティコモンズや家庭からでも中身がわかるような方法が考えられないかということの日頃から思っている。

見出しだけ、あるいは表紙だけは分かるが、中身がどんな内容でどのような表現なのかというのが少しでも分かればいいと思う。全部が分からなくても、途中を斜めに黒く塗りつぶしてでもいいので、一部でも内容がわかるような方法を取ってもらえると、利用者としては大変ありがたいと思っている。

コミュニティコモンズの機能についても、少しは本を残してもらえると理解しているので、少し時間が空けば時間を潰すという形じゃなくて、有効に使えるような居場所を残してもらえるとありがたいと思っている。

#### (教育部)

最初に、図書館の統計データの話で、若年層の利用が少ないという傾向なので、そういうところも時代に合わせた形を含めていかなければと考えている。

図書館の拠点を3つにするというところで、同じ内容であってもあまり意味がないという御意見について、基本的なところはやはり資料を揃えていく必要があると思うが、プラスアルファの部分でどういった特徴を持たせた方がいいのかというところは、過去の司書にも意見を聞く中で、調べ、レファレンスに特化しているとか、地域によっては中高生がよく使うというところでヤングアダルトの本を揃えた方がいいとか、委員がおっしゃる内容を含めて上手く取り込めるように検討していきたい。

本の内容については、前回、勘違いしていたところがあったが、今は帯やPOPで内容やあらすじを紹介していて、そういったものはもちろん問題ないと思っている。本を紹介するときに、コメントを残すとか、内容を紹介することはいいと思うので、そういうところでいただいた御意見をやっていきたい。

また、フィードバックしていきたいと思っている。

#### (委員)

1年間をかけてさまざまな意見を取り入れながらまとめてくださった提言だと感じた。8館を維持することはどう考えても大変で、3館にこの機能を集中させたということで、私たちが子供の頃の図書館との機能は明らかに違ってきていて、必要とされる機能を盛り込んでいただけたことで3館がさらに充実するんじゃないかと期待がある。

だが、コミュニティコモンズにならなかった5館の役割というのが、今後どうなっていくのか不安もある。近くにあるから借りに行けたという方もいると思

う。そういう方にも借りられるような工夫をしていただきたい。

学校との連携について。長坂小学校では調べ学習に必要な図書が学校の廊下に置いてあって、子供たちが自由にそれを借りて調べるといったようなことをされていて素晴らしいことですが、コミュニティコモンズと距離がある、特に白州、武川の学校への配慮がこういうあり方の中で薄れることがないようお願いしたい。

(教育長)

先日、出張で県立図書館へ行った際、平日の昼間だったが、学生から年配の方まで多くの利用者の方が来ていた。時間があつたので、全部回ってみたが、やはり魅力があるなとつくづく感じた。駅に近いということもあるが、これなら距離が遠くても来るなど。1日いられる場所ということも感じた。

さらに、富士川町の図書館にも行ったが、出来たばかりでとても魅力的な図書館だった。施設が新しいから魅力的ということもあるが、両方について感じたのは司書の方が多いということ。色々な対応をしている。司書の皆さんがそれぞれ分業というか、チームがあつて、色々な対応をしている。

なので、来客している方たちも関わってもらっていて、これが司書の役割だなということを感じた。こういう状態を見るとまたそれを求めてやってくる人が多いんだろうと思った。

北杜市の司書は本当にたくさんいるが、分散している状況で施設の維持管理、それから本の貸し出し等、全てではないが費やされてしまう。やはり司書の専門性をもっと生かせる、柔軟に対応できる体制が必要。

アウトリーチというのがさっき出たが、図書館で人を待っているのではなく、図書館から出ていくということもこれから図書館機能として求められる。司書がいろんな専門性を持って、それを高めて図書館から出ていくことによって、さらに図書館に呼び込むことに繋がっていくと、図書館の専門性という意味で感じた。

コミュニティコモンズについて、各地区には公民館があり、それぞれの拠点になっているわけだが、新しく移住される方も多くいる中で、コモンズはこれからの新しい交流の拠点、居場所になっていければと思っている。

本に囲まれながら、さまざまな人たちが集まって交流の場となるきっかけ作り。そこには、アウトリーチの一環として司書も当然出かけられるような対応もしていく。状況に応じた、地域の実態に応じた、そういう活動の拠点になってほしい。

(議長)

県立図書館の館長さんだった阿刀田先生が、図書館の一番の役割というのは、司書が子供たちにこの本がいいから読んでごらんや、次はこの本を読んでみなと、そういうコミュニケーションが一番大事で、それが、図書館の大きな役割だとおっしゃっていた。

そういうことが図書館に課せられていて、本を読む人が本当に少ない今、私も職員に本を読もうと声をかけている。本を親しんで読むという習慣が非常に大事で、本好きの子供が増えていくような新しい図書館にしていければと思っている。

(議長)

その他について、意見、質問等はあるか。  
以上で協議事項を終了する。

(事務局)

以上で北杜市総合教育会議を終了する。

## 5. 閉会

(午前11時40分)